『論叢』玉川大学教育学部紀要　第17号　2017，pp. 23～35

［原著論文］

歴史ドキュメント作品「プロジェクトX」を用いた主体的な学習態度と史料批判の観点の育成

――「社会科・地理歴史科指導法」での活用を見据えた「日本と外国の歴史」における史料批判学習の実践から――

濵田英毅

要　約

もはや教科指導力や実践的指導力のみが，教員に求められる資質能力ではない。情報が日々刷新される現代社会では，新たな教育課題も生起し続けると考えられる。そのため，教員採用時の現場即応力は前提として，その後も学び続ける意欲の旺盛であることが，本当の意味での即戦力であると認識されつつある。また，情報過多の時代では，教員として必要な教科・教職の専門知識が高度化した上に，情報を批判的に吟味し選別する力が求められている。こうした教育現場の実情に対して，教員養成の現場は的確に応えていく必要がある。すなわち，ICTの活用などの現代的な教育課題や，教科・教職領域における専門知識の高度化への対応だけでなく，批判的思考力や，主体的な学習態度の育成にも留意することが求められているのである。こうした課題に対する一つの解決策が，歴史ドキュメント作品を用いた史料批判学習である。社会科系教科の教員養成課程の授業で実践した結果，単なる歴史的方法論の理解にとどまらず，教員としての自覚の向上や学習意欲の向上，学んだ内容を自分自身の教育方法・教育技術へ応用しようとする姿勢が見られ，主体的な学習態度の萌芽と教科指導力や実践的指導力への学習の転移が認められた。

キーワード：学び続ける教員像，公民的資質の育成，史料批判学習，社会的な見方や考え方，学習の転移

1. はじめに

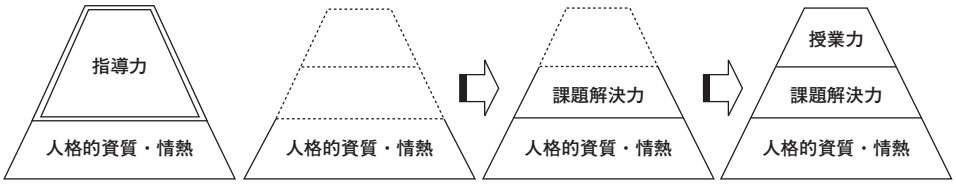
新学習指導要領や教員養成の在り方に関する中央教育審議会の答申等が近年続々と発表され，次世代の理想的な教員像がより明確化されてきた。アクティブ・ラーニング，ICT教育，チーム学校といった「新たな教育課題」に対応できる教員を養成するには，教育課程の大胆な見直しが必要である。その上，現代社会は情報が日々刷新される時代である。学術研究の進捗により学習内容が進化・発展していくだけでなく，上記の内容とはまた異なった，第二の新た

所属：教育学部教育学科　受理日　2017年10月30日

な教育課題に直面する事態も十分に想定される。ゆえに，教員には新たな変化にその都度対応していく資質能力が不可欠であり,「学び続ける教員像の確立」が求められるのは当然である。これからの教員養成においては，教員志望者に主体的な学習態度を身につけさせる具体的な学習方法の開発が，重要な課題であるといえよう。

こうした課題は，教員採用者側も共有している。例えば，神奈川県教育委員会（2007, 2015）は,「人格的資質・情熱」という基盤的な資質・能力の上に，課題解決力と授業力からなる「指導力」を身につけた教師を「めざすべき教職員像」とし,前者の構成要素の一つに「変化に対応し，学び続ける向上心をもっている」ことをあげている（図1)。自らが主体的に取り組む自己啓発こそが能力開発の基本であるとも記しており，主体的に学び続ける資質能力が重要な採用条件の一つであることが明確に示されている。

また，独立行政法人教員研修センター理事長の髙岡（2015）は,「予測困難な未来を担う子供たちに，時代を乗り切る力をつけることが課題だとすれば，その仕事がより高度で複雑なも



人格的資質・情熱　**教職員としての人格的資質・教職への情熱**

◎豊かな人間性と社会性，高い対人関係能力とコミュニケーション能力をもっている
○子どもへの教育的愛情と責任感，教職に対する使命感と誇りをもっている
○高い倫理観をもち，公平・公正に行動できる
○変化に対応し，学び続ける向上心をもっている

課題解決力　**子どもや社会の変化による課題の把握と解決**

◎子どもをよく理解し，多様な教育的ニーズに対して適切に対処・指導できる
○得意分野をもち，個性豊かで，連携・協力しながら指導できる
○豊かな創造力をもち，新たな課題へ積極的に挑戦する意欲や実行力をもっている
○教職員全体と協力し，学校全体を意識しながら組織的に取り組むことができる
○保護者，地域の人々と協力して取り組むことができる

授業力　**子どもが自ら取り組む，わかりやすい授業の実践**

◎子どものやる気を引き出し，意欲を高めることができる
◎わかりやすい授業の実践ができる
○高い集団指導の力をもち，望ましい学級づくりができる
○授業研究を生かした校内研修に進んで取り組むことができる

※　◎は,「教育に関する学校関係者向け意識調査結果」において，保護者，学校評議員が教職員に望む割合の高かった項目

図1　めざすべき教職員像（神奈川県教育委員会）

のになるのは当然」であり，「子供の認知や行動について，コミュニケーション力，自然や社会認識の発達の過程，アクティブ・ラーニング等の新しい教育方法について等々，教育学・心理学・脳科学などの最新の科学や学問的成果に敏感に反応する姿勢が不可欠」であると言及する。結論としては「自らの仕事に必要だと考えられる知識や理論を貪欲に獲得しようとする人材像」こそが現代社会で最も求められる教員像であると断じており，教員の養成・採用・研修という立場を超えて，共通の課題が認識されていることが確認できる。

このように日々情報が刷新される現代社会を生き抜くには，膨大な情報の真贋や重要度を適切に取捨選別して使いこなす情報リテラシーや，情報メディアの特性を踏まえながら情報を取捨選別して使いこなすメディアリテラシーといった資質能力が不可欠である。情報を無批判に受容する市民では，民主主義が成立しない。あらゆるプロパガンダに反応するようでは，不安定な社会に陥ってしまう。そうならないためにも，特に公民的資質の育成を担う社会科系の教科（社会科・地理歴史科・公民科）は，情報を批判的に吟味し選別する力の育成に留意する必要があろう。

以上から，新たな時代の展開を見据えた場合，教員（特に社会科系教科の教員）に求められる資質能力として新たな要素が加わったことが分かる。これまでの教科指導力と実践的指導力という基本的な資質能力に加え，将来の予測が困難で情報過多の現代社会においては，主体的な学習態度の育成と，情報を批判的に吟味し選別する力の育成が，教員養成の新たな本質的課題として浮上したといえる。そこで本稿は，この二つの本質的な課題を解決するための学習方法として，歴史ドキュメント作品を用いた史料批判学習を提案する。具体的には，歴史ドキュメント作品をただ視聴させるのではなく，映像や音声の表現で使われた技法等を手がかりに制作者の意図を考えさせ，配信される情報の意味を問うという学習方法である。こうした批判的な思考の方法を教員養成課程で身につけることは，情報を単に伝達するのではなく，情報の意味を問うことで情報への深い理解を促す「主体的・対話的で深い学び」に必要な基本的資質能力の向上にもつながると考えられる。

以下，「2. 歴史学における史料批判の意義と教員養成」では，この史料批判学習がもたらす教育上の意味について説明する。そして「3. プロジェクトXを用いた史料批判学習」では，実際に史料批判学習を経験した学生が歴史ドキュメント作品に対してどのような認識を持つようになったかを考察することで，教員養成課程における史料批判学習のもたらす教育効果を検討したい。

2. 歴史学における史料批判の意義と教員養成

社会科系教科の学習で映像教材の活用は広く行われているが，あくまでもそれは映像教材の情報に基づいて授業を展開するためであり，映像教材自体を批判の対象として活用する例はあまりない。これは，歴史教科書自体を批判の対象として授業をする例があまりないことと同様

である。歴史教科書には歴史事実が記されていると同時に，歴史解釈も含まれている。歴史事実は学問的に検証されたほぼ正しい事実であるといえるが，歴史解釈はあくまでも執筆者の価値観に基づく事実と事実の関連性を推測して構成されたストーリーであり，そのまま正しい事実として受け取ることは危険である。尤も，歴史教科書について，中等教育段階でそこまで踏み込んで授業を展開する機会はほぼあるまい。しかし，歴史ドキュメント作品の場合には，歴史教科書ほどの厳密な考証を経ているとは限らず，内容の提示に関して注意が必要である。歴史ドキュメント作品の出来栄えが良いと，放映内容の全てが歴史事実であると誤認されがちだが，仮に一つ一つの歴史事実は正しくとも，それらをつなげる作業は歴史解釈であり，あくまでも制作者の価値観に基づくストーリーで構成されているという点には十分な注意を払わせる必要があろう。つまり，歴史ドキュメント作品は，本来的にはメディアリテラシーを踏まえた上で活用すべき映像教材であり，少なくとも授業で活用しようとする教員が無批判のままに活用する態度は，たとえそれが優れた作品であるとしても問題がある。

このように資料に書かれた情報の真実性を批判的に検証する作業を，歴史学では史料批判という。日本学術会議史学委員会（2014）によれば，大学の教養課程における歴史教育は，「これまでの世界に対するより多面的で深い理解の獲得に加えて，様々な形で身の回りに存在している歴史文化について，それらが示す社会的諸側面を考察」することが目的であり，「歴史理解に裏付けられた現代世界認識とともに，自分とは異なる文化や価値観に対する寛容かつ批判的な態度，日々の市民的生活に歴史的な認識を生かし，また生涯にわたって歴史を学び続ける姿勢」を身につけることを期待している。一方，歴史学科などの専門教育課程は歴史の基礎的な研究能力の育成を図ることが目的であり，「調査方法と得られたデータについての批判的吟味，事実判断と価値判断の区別，論理的な思考と表現力，批判に対する冷静な対応といった高度な市民的資質を育成することにつながる」としている。ここでいうデータについての批判的吟味，ならびに事実判断と価値判断の厳密な区別が，史料批判に相当する思考作業といえる。つまり，大学の教養課程でもある程度の批判的な態度が身につくことが期待されるものの，やはり史料批判という方法論を踏まえなければ「高度な市民的資質」の育成にはつながらないことが明言されているのである。社会系の教科は公民的資質の育成が最終目標である以上，歴史学科などの専門教育課程ではない教育系大学の教員養成課程においても，史料批判という学問的方法をある程度身につけることを目指すべき理由はここにある。

また，日本学術会議は社会科系教科の教員養成に関し，次のように提言している。「初等・中等教員を養成する課程は，歴史学修を通じた市民性の涵養という課題に対して特に大きな責任を負っている」のであり，「初等・中等教員の養成にあたっては，児童生徒の発達段階を考慮し，また教室の実態を踏まえつつ，上記のような大学が目指す歴史学修を平易な形で組織し，支援する力を開発することが重要」である。しかし，知識量などの問題があり，「まず歴史学を専攻していない学生に対し，十分な歴史の知識に加えて歴史学の基礎的な方法を身に付ける機会を保障」し，「すべての教員志望の学生に対して，児童生徒が多様な資料に触れることを

通して過去の事象を多角的に捉え，その上で学問的に妥当な自らの理解を持つことを重視する近年の歴史教育学の方法を修得できるよう措置することが求められる」と説明する。言い換えれば,「市民性とは正に原則としてすべての市民に期待される資質」であり，そうした公民的資質を身につけるには，基礎的な史料批判の方法を理解すべきであると，ここにおいても示唆されているといえよう。

以上のように，歴史教育で公民的資質の育成を目指すならば，史料批判の観点を教えることがどうしても必要であり，歴史学を専門としない教員養成系大学の社会科系教科の教員志望者でも分かりやすい史料批判学習の方法を開発する必要がある。筆者が歴史ドキュメント作品に着目した理由は，まさしくこの点にある。歴史資料そのものは，読解する段階での高い専門性が要求され，専門の研究者でなければ肝心の情報の吟味にまでなかなか辿り着くことができない。しかし，一般視聴者向けに制作された歴史ドキュメント作品を活用すれば，誰にでも分かりやすい史料批判学習が可能である。次章では,これまで大学で行ってきた授業実践をもとに,その教育効果を検証していきたい。

3. プロジェクトXを用いた史料批判学習

筆者がプロジェクトXを用いた史料批判学習に取り組み始めたきっかけは，2011 ～ 16年度に担当した駿河台大学メディア情報学部の専門科目「歴史資料論」であった。同学部には図書館・アーカイブズに関するコースのほか，映像制作に関するコースが設置されており，どちらに所属する学生にも履修できる授業内容であることが求められた。授業の最大の目的は，歴史資料を通して歴史学の本質に迫ることであった。歴史はストーリー(物語)で構成されており，その真偽を検証するには史料批判を経なければならない。これを理解させるためには，ストーリー性が明確で，史料批判がしやすい題材が必要であった。そこで，2012年度の授業より，現代の視点から当時の歴史事実を魅力的に伝える，一般視聴者向けに制作された歴史ドキュメント作品，プロジェクトXを用いることにしたのである。

学生には，単にストーリー展開を理解させるのではなく，映像や音声等の技法で場面が切り替わる意味を考えさせた。その結果，制作者が意図的に技法を用いていることを理解させることができ，さらにその仕組みによってストーリーが意図的に展開されていることを理解させることができた。具体的には，次の六点に注目しながら視聴させた。

①ストーリー展開の方法：文脈・物語の構成
②登場人物の登場方法：物語の素材をどのように扱っているのか
③一次資料と二次資料の使い分け
④当時の映像と現在の映像との関係：現場とスタジオのシーンの切り替わり
⑤叙述の方法（1)：ナレーションの意味・方法

⑥叙述の方法（2）：映像・音声の効果的方法

筆者と同様にプロジェクトXを用いて授業実践を行った前田（2004）は，「物語を授業に取り入れることを前提とする限り，授業はその話の内容に引きずられてしまう。すなわち，授業は『成功の物語』を理解し，批評し，分析させる場から飛躍できないところに課題が残る」と指摘するが，具体的な映像や音声の技法に視点を定めた結果，制作者のストーリー展開の意図が明確となり，ストーリー展開のより深い理解だけでなく，ストーリーが描かれる背景の理解にもつながった。また，一般的な題材のため，専門外の学生もグループ・ディスカッションに参加することができ，理想的なアクティブ・ラーニングを実践することができた。その結果，史料批判学習を行った2012年度から2016年度までの5年間にわたり，本講義は一貫して高い授業評価を得ることができた。

この史料批判学習の成果を教員養成に応用しようと試みたのが，2017年度から担当した玉川大学教育学部の専門科目「日本と外国の歴史」であった。歴史知識の乏しい生徒にも歴史のイメージを与えなければならない社会科系教科の教員にとって，映像教材の活用はたいへん重要な手段である。特に，明確なストーリー性のある歴史ドキュメント作品は，歴史のイメージを与えるには最適な教材ともいえる。しかし，制作者の意図を吟味した上で教材を選択したのでなければ，授業内容自体がその作品の価値観に引っ張られてしまいかねない。そこで，映像教材を主体的に活用するための情報リテラシーやメディアリテラシーを身につけることを目的として，プロジェクトXを用いた史料批判学習を行うことにしたのである。

授業の方法としては，まず学生にプロジェクトXを視聴する目的を明確に伝えた上で，前述した技法の切り替わる場面とその意味に注目するよう指示し，視聴させた。まず議論を通して学生自身により考察を深めさせた後，結論として以下のように整理したプロジェクトXの技法と特徴を伝えた（表）。

これらの技法や特徴を整理したことで，歴史像をダイナミックに表現する方法や，歴史のストーリーを構成する方法を，制作者の立場から理解させることができた。そして，ストーリー展開が制作者の明確な意図に基づく解釈であることに気づかせることができた。また，学びの成果として，「小中高の生徒に歴史像を構築させるには，どのような授業内容・授業構成が望ましいと考えるか。プロジェクトXの構成をヒントとして説明しなさい」という振り返りの問いを，ポートフォリオに投稿させた。史料批判学習から得られた気づきを整理させるとともに，自分自身の教育方法･教育技術と照らし合わせることで，学習の転移を促すことが目的であった。

その結果，多くの学生のポートフォリオで，学習の転移を示す記述を認めることができた。学生Aは，「教師は，指示や発問に意図を持たせることが重要であると考える。教師側に意図がなく，思い付きで授業や活動をした場合，子どもは何も学ばないと考える。そのため，今回の講義内容は意図を考え，見抜く視点が求められる教師を目指す私たちにとって必要不可欠な授業内容であると感じた」という感想を記した後，続けて次のような気づきを記している。「今

表　シーンや展開ごとに見られるプロジェクトXの技法と特徴

冒頭	● テーマとなる画像を，飽きない程度の長さで切り替えて表示している ● 画像には印象的な「一言」が添えられている ● テーマ音楽が，「序破急」あるいは「起承転結」の展開を暗示する旋律である ● テーマ音楽の切り替わりと共に，テーマとなる画像の内容もまた切り替わっている
内容：ストーリーの全体構成	● 人から始まり，人に終ることで，テーマが個人の物語のうちに単純化されている（個人の思いの，実現の物語である） ● 映し出す対象を絞っている（ズームアップの場面） ● 全体的に，「人」・「周辺状況」・「人」・「周辺状況」・「人」という交互の構成で，適切に切り替えが行われている ● その中でも，一貫して登場するキーパーソンがいる
内容：物語の筋の誘導	● ナレーションが低音で，無機質な語りである（あえて，そこに視聴者の注意が向かないようにし，物語の理解に集中させる） ● ナレーションの語りは，三文節以内の短文であり，体言止めを多く用い，シンプルな構造である（サウンド・バイト） ● ストーリーの盛り上がり・盛り下がりを，音程で表現している ● 時に，ナレーションでも場面の盛り上がりを表現している
内容：歴史の主観的・客観的視点	● 人の物語の中心に置き，主観的な歴史が描かれる（そこに，感情移入の可能性が生まれる） ● その当事者が語ることで，視聴者に説得性を持たせることができる ● 当時の歴史から，スタジオに戻ることで，客観的な振り返りが行われる ● 物語自体が対比構造（対立者がいる）にあり，視聴者が客観的に分析しやすい
内容：現代と過去との対照	● 過去の人から始まり，現代の人へとそれが受け継がれるというストーリーである ● まず，過去の人の行動を，画像等を用いて簡潔に紹介している ● そして，つながりのある現代の人が過去の人を振り返ることで，現代的な目線から我々は歴史を眺めることができる ● 過去は静止画，現代は動画という対比
内容：ストーリーの切り替え	● 決め台詞で，周囲の音声が無音になる ● 決めどころで，ズームアップが多用される ● 内容の切り替わりで，新たな登場人物が出る（起きている事実に対する，対立者・影響力のある人物） ● 映像の内容は，ごくシンプルな作り ● 歴史の転換点で，必ず人の決断を出し，歴史をドラマティックに演出している ● 大きな話題の転換は，スタジオに戻ることで行う
まとめ	● 登場人物の回想で，人物から始まった物語を，人物の物語として収束させている ● 現代の人物の回想で，現代的な視点から，過去の歴史を客観的にまとめている ● 主要な登場人物のみならず，全ての人物の係わりが重要であったことが示され，物語の単純化を防いでいる ● 人物の感情の高まりと共に，音楽の旋律が高まっていく ● 歴史を思い切って単純化した構図で描くことで，視聴者が理解しやすい物語を描くことが出来る ● その物語は人が中心とし，客観的な歴史を描く中で，感情移入する機会（当事者の語り，思いの実現）を入れて，理解を促進する ● 一方で，歴史の単純化，強引なストーリーであるともいえる

回の授業冒頭で先生が話していた映像を授業で取り入れるときの効果や注意点を教師として理解しておきたい。あくまで映像は補助教材であり，子ども自身で解釈させるような授業にすることが求められる。そのためには，映像で当時の歴史からスタジオに切り替わるという様に客観的な振り返り（小休止）を入れることが良いと考える。また，スタジオのシーンでは，具体物を用意して実際に再現をしていた。これは歴史を学ぶ上で極めて重要なことだと感じた。具体物を用意することにより，理解が深まる」。つまり，史料批判学習で得られた具体的な気づきを，小休止（ストップモーション）や実物教育といった，具体的な教育方法・教育技術に読み換えていることが確認できる。学生A以外にも多くの学生が同様の指摘を加えており，他には歴史をストーリー化して語ることの重要性，インパクトのある写真の表示やテーマを絞った写真の表示，授業構成の起承転結，授業のテンポやリズムの重要性，人物に焦点を当てることの重要性などについて言及する例があった。

また，学生Bの「今までだったら面白いか面白くないか，ただそれだけの視点で見てしまっていたけれど，これからは違った視点でも教材を見つめる必要があると身をもって感じた」や，学生Cの「今まで映像資料を教育者としての視点で見ることはなかったので新鮮な時間でした。もっと教師になるのだという意識を持って，色々なことに対して教師の目線で見てみたいなあと感じました」，学生Dの「少しでも，授業内容が生徒の興味関心を引き立てることができるようできることはどんなことでもやってみる必要があると考える。教員はさまざまな経験をし，その時の生徒の実態や状況に合わせて授業の仕方を変え，臨機応変に対応できる教員になりたいと思う」という感想から，学生の主体性を喚起し，意識を現場の教師レベルへと高めたという点で，単なる教科指導力のみならず，現場の即戦力につながる実践的指導力の向上にも寄与したと評価できよう。特に学生Dの状況に合わせた臨機応変な教師になりたいとの記述は，学び続ける教員像に相当する主体的な学習態度の萌芽と捉えることも可能であり，史料批判学習が教員として求められる基本的な資質能力（教科指導力・実践的指導力）の向上に資するだけでなく，時代特有の二つの本質的課題（主体的な学習態度・情報を批判に吟味し選別する力の育成）にも応え得る学習法であることを示していよう。

4. おわりに

将来の予測が困難で情報過多の現代社会では，教員に求められる資質能力もまた変化しつつある。従来の教科指導力と実践的指導力という基本的な資質能力に加えて，時代の変化に柔軟に対応し続けるための主体的な学習態度の育成と，情報を批判的に吟味し選別する力の育成が不可欠となった。特に後者は，公民的資質の育成を担う社会科系の教科にとって，きわめて重要な課題であるといえよう。本稿は，新時代の教員養成をめぐるこうした課題に応えるべく，教員養成課程における史料批判学習の開発と導入について検討したものである。

史料批判は本来，歴史学に関する高度な専門性があって，はじめて理解し活用できる学問的

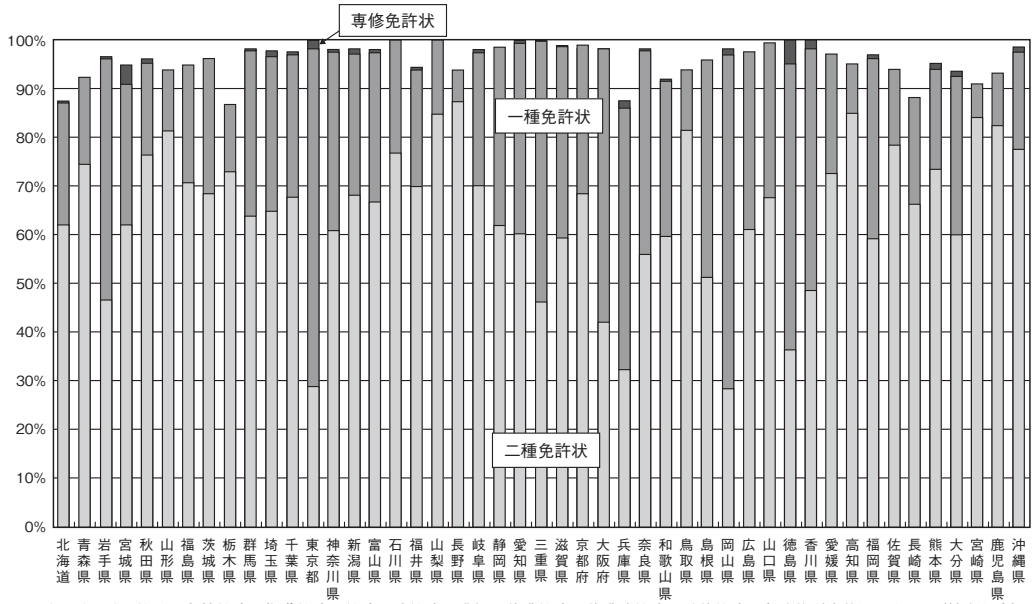
分析方法である。しかし，一般視聴者向けに制作された歴史ドキュメント作品（プロジェクトX）を素材として用いることで，歴史学を専門的に修めていない教員養成系大学の学生でも史料批判の方法論を学ぶことを可能にした，分かりやすく平易な学習法が史料批判学習である。

史料批判学習の目的は，単に作品内容を観賞するのではなく，映像や音声の表現で使われた技法等に着目することで制作者のストーリー展開の意図について考え，制作者が制作した背景を理解することにある。これを実践することで，映像教材を主体的に活用する力を身につけることができる。そして，この学習で得た知見を教育方法・教育技術にフィードバックさせることで，基本的な資質能力（教科指導力・実践的指導力）だけでなく，時代特有の二つの本質的課題（主体的な学習態度・情報を批判的に吟味し選別する力の育成）に対しても効果を得ることができる。このように，史料批判学習は単なる教科としての学びだけでなく，「新たな教育課題」に対応し「学び続ける教員像の確立」にも寄与することが期待される，教員養成系大学の社会科系教科（社会科･地理歴史科･公民科）において新たな可能性を有する学習法といえる。

今後，教員需要の減少期に入り，教員採用をめぐる大学間の競争がますます激しくなる。厳しい教員採用市場において教員養成系大学が勝ち残るためには，教職領域の専門性をより高めつつ，教科領域の専門性を開放制の教員養成に負けないレベルにまで高めることが必要である。例えば，国立教員養成大学･学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議の報告書（2017）は，教職大学院における教科領域の学修ニーズが高まっているとして，その理由を以下のように記している。

> 子供たちの基礎的・基本的な知識・技能の修得のみならず，思考力・判断力・表現力等を育成するためには，教員は，教科に関する深い学問的な知識・理解を身に付けた上で，学習内容の系統性や教科の本質を理解し，子供たちの思考を揺さぶり，新たなものの見方の発見を促すような課題探究を行う授業を構想したり，教材を開発したりすることが必要となる。

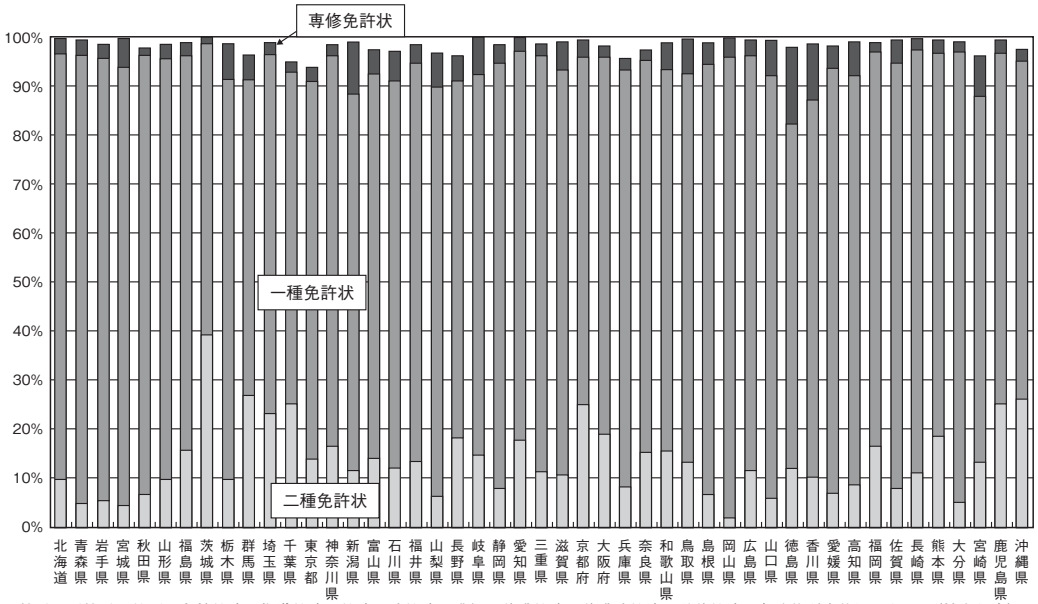
また，中央教育審議会答申（2015）も，「養成段階は，『教員となる際に必要な最低限の基礎的･基盤的な学修』を行う段階であることを改めて認識することが重要である」と言及しており，これからの教員に求められる教科に関する深い理解，本質的な理解のためには，史料批判も含めた深い学びが必要であることが分かる。日本学術会議が指摘した通り，たしかに史料批判は学問的に高度な思考作業である。しかし，史料批判こそ歴史学の根本ともいえる分析方法であり，それこそが有識者会議のいう「教科の本質」，中央教育審議会のいう「基盤的な学修」に相当する内容であるともいえる。加えて，学校段階が進むにつれ教員に専門性の高さが要求される現状を見れば（図2-1 ～ 4），教員養成系大学は，教科領域の専門性で勝る開放制の教員養成に対抗するためにも，分かりやすく平易に史料批判を学ぶことができる史料批判学習の導入を検討すべきである。



※園長，副園長，教頭，主幹教諭，指導教諭，教諭，助教諭，講師，養護教諭，養護助教諭，栄養教諭の免許状所有状況である。（抽出調査）
※幼稚園の普通免許状を所有しない教諭（臨時免許状のみ所有など）がいるため，専修・一種・二種免許状の合計は，100％にならない。

（教職員課調べ）

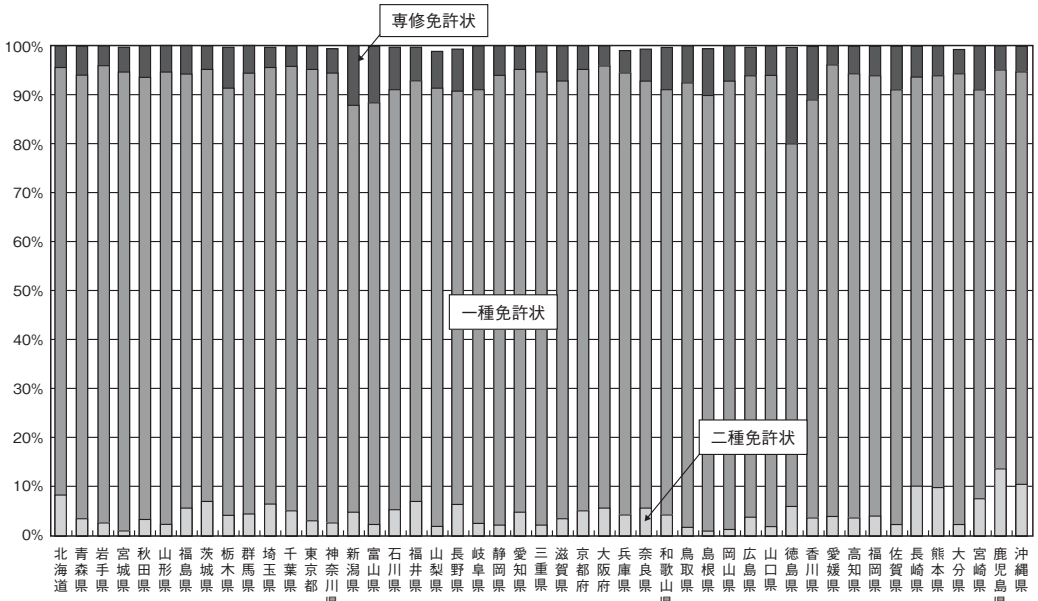
図2-1　幼稚園免許の種別：平成22年度公立学校教員の免許状所有状況（「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」参考資料1より）



※校長，副校長，教頭，主幹教諭，指導教諭，教諭，助教諭，講師，養護教諭，養護助教諭，栄養教諭の免許状所有状況である。（抽出調査）
※小学校の普通免許状を所有しない教諭（臨時免許状のみ所有など）がいるため，専修・一種・二種免許状の合計は，100％にならない。

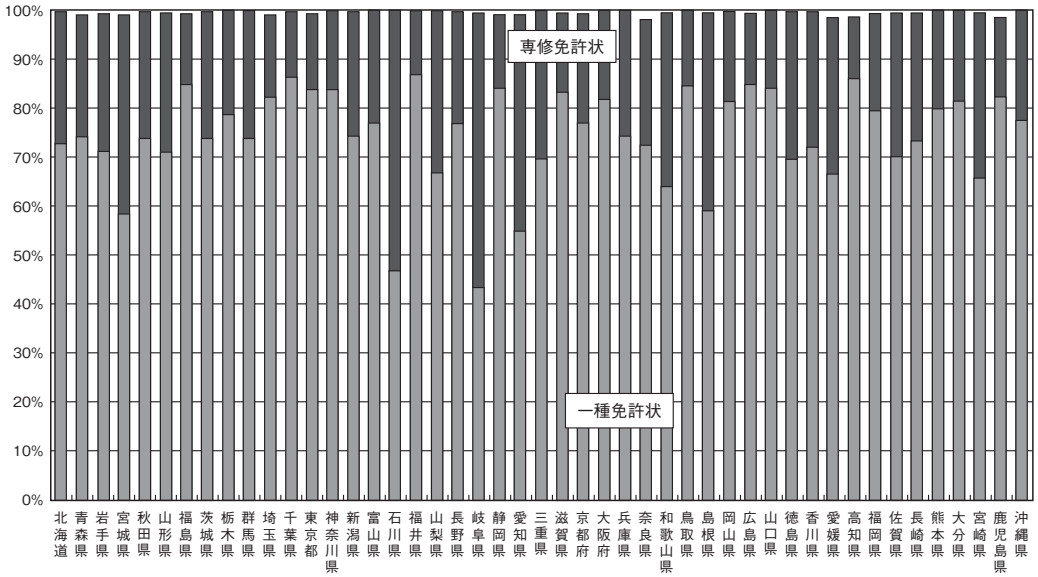
（教職員課調べ）

図2-2　小学校免許の種別：平成22年度公立学校教員の免許状所有状況（同上資料より）



※校長，副校長，教頭，主幹教諭，指導教諭，教諭，助教諭，講師，養護教諭，養護助教諭，栄養教諭の免許状所有状況である。（抽出調査）
※中学校の普通免許状を所有しない教諭（臨時免許状のみ所有など）がいるため，専修・一種・二種免許状の合計は，100％にならない。
（教職員課調べ）

図2–3　中学校免許の種別：平成22年度公立学校教員の免許状所有状況（同上資料より）



※校長，副校長，教頭，主幹教諭，指導教諭，教諭，助教諭，講師，養護教諭，養護助教諭，栄養教諭の免許状所有状況である。（抽出調査）
※高等学校の普通免許状を所有しない教諭（臨時免許状のみ所有など），養護教諭及び栄養教諭の二種免許状所有者がいるため，専修・一種の合計は，100％にならない。
（教職員課調べ）

図2–4　高等学校免許の種別：平成22年度公立学校教員の免許状所有状況（同上資料より）

参考文献

「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」中央教育審議会，2005年10月26日。
「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」中央教育審議会，2012年8月28日。
「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」中央教育審議会，2015年12月21日。
「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて―国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書―」国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議，2017年08月29日。
「教職員人材確保・育成基本計画～高い指導力と意欲をもつ教職員の確保・育成をめざして～」神奈川県教育委員会，2007年10月。
「教職員人材確保・育成計画～意欲と指導力のある教職員の確保・育成をめざして～」神奈川県教育委員会，2015年10月。
「報告　大学教育の分野別質保証ための教育課程編成上の参照基準　歴史学分野」日本学術会議史学委員会史学分野の参照基準検討分科会，2014年9月9日。
鴛原進「社会科歴史と歴史科との違いは何か」社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』明治図書，2012年，290–297ページ。
全国社会科教育学会編『社会科教育実践ハンドブック』明治図書，2011年，153–156ページ。
髙岡信也「『学び続ける教員像』の理念を実現する新たな養成・研修システムの構築（中教審初中分科会教員養成部会発表資料）」中央教育審議会，2014年3月25日。
髙岡信也「『教え』から『学びの専門家』へ　教員研修制度の大改革―法定研修から校内研修まで　『学び続ける教員像』の理念を実現するために」『教職研修』518号，教育開発研究所，2015年10月，18–19ページ。
高橋さおり・髙瀬淳「『学び続ける教員像』の確立を意図した教員養成カリキュラムの開発について―国語（文学）の教科内容構成と道徳科指導法・特別活動指導法との関連に着目して―」『北翔大学短期大学部研究紀要』第55号，2017年3月，99–106ページ。
濵田英毅・佐久間健「歴史的公文書を用いた学習支援コンテンツの検討―公民的資質の育成を目的として」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報　2015–2016』第13号，2016年3月，25–33ページ。
濵田英毅「歴史総合に対応した教員養成の検討―『日本と外国の歴史』の授業実践による地理歴史科指導法の模索―」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報　2016年度』第7号，27–40ページ。
前田聡一「共感的理解型TV番組を活用した社会科授業構成―『プロジェクトX』を事例として―」『社会科研究』第61号，全国社会科教育学会，2004年，41–50ページ。
松野良一・塚本恵美子・間島貞幸・五嶋正治・村田雅之『映像制作で人間力を育てる―メディアリテラシーをこえて―』田研出版，2013年。
村田雅之「映像制作を通して学ぶ―新しい教育デザインの可能性―」松野良一・塚本恵美子・間島貞幸・五嶋正治・村田雅之『映像制作で人間力を育てる―メディアリテラシーをこえて―』田研出版，2013年，165–209ページ。
柳下高行「資料　インタビュー　NHKプロジェクトXはどう創られているのか―今井彰チーフ・プロデューサーへのインタビュー」『白鷗大学論集』第16巻第1号，2001年9月，291–323ページ。

Upbringing of the Independent Learning Manner and Historical Materials Criticism Using the History Document Work “Project X”: Practice Report of Historical Materials Criticism in “Japan and the Foreign History” that Fixed its Eyes on the Utilization by “The Social Studies, Geography History Department Instruction Method”

Hidetake HAMADA

Abstract

Only the curriculum leadership skills and practical leadership skills are no longer the qualities required of teachers. In modern society where information is updated day by day, new educational tasks will continue to occur. For that reason, it is recognized that not only power corresponding to the site but also willingness to continue learning is the real teacher's ability to qualify. Moreover, in the era of information overload, the expertise of the subjects and teaching professionals necessary as faculty members has become advanced, and the ability to critically examine and select information is required. In response to the actual situation of such educational sites, it is necessary to accurately respond to the teacher training site. In other words, in order to respond to contemporary educational issues such as utilization of ICT, respond to sophistication of expert knowledge of subjects and teachers, not only to cultivate critical thinking abilities, but also to develop self-directed learning attitudes It will not. The possibility of solving such a problem is historical materials criticism. As a result of practicing in the lesson of the social studies teacher training course, we try not only to understand history but also to improve awareness as a teacher, to improve learning motivation, to apply the learned contents to our own educational method / educational technology posture was observed, learning transition to academic leadership ability and practical leadership was recognized.

Keywords: ideal teacher image that continue learning, upbringing of the citizenship, practice of historical materials criticism, social viewpoint and way of thinking, transfer of learning